

# 痴人と死と

ホフマンスタアル Hugo von Hofmannsthal

森鷗外訳

青空文庫



為<sup>しごと</sup>事室<sup>べや</sup>。建築はアンピイル式。背景の右と左とに大いなる窓あり。真<sup>ま</sup>中<sup>んなか</sup>に硝<sup>ガ</sup>  
 子<sup>ラス</sup>の扉ありてバルコンに出<sup>い</sup>づる口となりおる。バルコンよりは木の階段にて庭に  
 降<sup>ふ</sup>るるようなりおる。左には広<sup>ひろ</sup>き開<sup>ひら</sup>き戸<sup>ど</sup>あり。右にも同じ戸ありて寝<sup>ね</sup>間に通<sup>と</sup>じ、  
 この分<sup>ぶん</sup>は緑<sup>びろ</sup>の天<sup>てん</sup>鷺<sup>ろう</sup>絨<sup>じゆ</sup>の垂<sup>たれ</sup>布<sup>ぬ</sup>にて覆<sup>おほ</sup>いあり。窓にそいて左<sup>かた</sup>の方に為<sup>な</sup>事<sup>じ</sup>机<sup>き</sup>あり。そ  
 の手<sup>て</sup>前に肱<sup>ひじ</sup>突<sup>つき</sup>の椅<sup>い</sup>子<sup>す</sup>あり。柱<sup>はしら</sup>ある処<sup>ところ</sup>には硝<sup>びろ</sup>子の箱<sup>はこ</sup>を据<sup>す</sup>え付<sup>け</sup>、その中<sup>うち</sup>に骨<sup>こつ</sup>董<sup>とう</sup>  
 を陳<sup>ちん</sup>列<sup>りやう</sup>す。壁にそいて右<sup>かた</sup>の方にゴチツク式の暗<sup>くろ</sup>色の櫃<sup>ひつ</sup>あり。この櫃<sup>ひつ</sup>には木<sup>もく</sup>彫<sup>ちやう</sup>  
 の装<sup>ま</sup>飾<sup>く</sup>をなしあり。櫃<sup>ひつ</sup>の上に古<sup>こ</sup>風<sup>ふう</sup>なる楽<sup>がく</sup>器<sup>き</sup>数<sup>かず</sup>個<sup>こ</sup>あり。伊<sup>イ</sup>太<sup>タ</sup>利<sup>リ</sup>亜<sup>ア</sup>名<sup>な</sup>家<sup>か</sup>の画<sup>え</sup>け<sup>が</sup>る<sup>が</sup>絵<sup>え</sup>の  
 ほとんども真<sup>ま</sup>黒<sup>くろ</sup>になりたるを掛<sup>か</sup>けあり。壁<sup>かべ</sup>の貼<sup>はり</sup>紙<sup>がみ</sup>は明<sup>あ</sup>色<sup>いろ</sup>、ほとんども白<sup>しろ</sup>色<sup>いろ</sup>にして隠<sup>い</sup>  
 起<sup>おこ</sup>せる模<sup>も</sup>様<sup>やう</sup>及<sup>およ</sup>び金<sup>きん</sup>箔<sup>ぱく</sup>の装<sup>ま</sup>飾<sup>く</sup>を施<sup>せ</sup>せり。  
 主人<sup>しゆじん</sup>クラウチオ。(独<sup>ひとり</sup>窓<sup>かたわら</sup>の傍<sup>かたわら</sup>に座<sup>ま</sup>しおる。夕<sup>ゆう</sup>陽<sup>ひ</sup>。)夕<sup>ゆう</sup>陽<sup>ひ</sup>の照<sup>しめ</sup>す濡<sup>ぬ</sup>めた空<sup>そら</sup>氣<sup>き</sup>に包<sup>か</sup>ま<sup>れ</sup>て山<sup>やま</sup>  
 が輝<sup>かが</sup>いてい<sup>る</sup>。棚<sup>たな</sup>引<sup>ひ</sup>いてい<sup>る</sup>白<sup>しろ</sup>雲<sup>くも</sup>は、上<sup>うへ</sup>の方に黄<sup>こが</sup>金<sup>ねいろ</sup>色<sup>いろ</sup>の縁<sup>ふち</sup>を取<sup>と</sup>つて、その影<sup>かげ</sup>は灰<sup>はい</sup>色<sup>いろ</sup>  
 に見<sup>み</sup>えてい<sup>る</sup>。昔<sup>むかし</sup>の画<sup>え</sup>家<sup>か</sup>が聖<sup>せい</sup>母<sup>ぼ</sup>を乗<sup>の</sup>せる雲<sup>くも</sup>をあんな風<sup>かぜ</sup>にえがいたものだ。山<sup>やま</sup>の裾<sup>すそ</sup>には雲<sup>くも</sup>  
 の青<sup>あお</sup>い影<sup>かげ</sup>が印<sup>いん</sup>せ<sup>ら</sup>れ<sup>て</sup>い<sup>る</sup>。山<sup>やま</sup>の影<sup>かげ</sup>は広<sup>ひろ</sup>い谷<sup>やま</sup>間<sup>ま</sup>に充<sup>み</sup>ち<sup>て</sup>、広<sup>ひろ</sup>野<sup>の</sup>の草<sup>くさ</sup>木<sup>き</sup>の緑<sup>きぬ</sup>に灰<sup>はい</sup>色<sup>いろ</sup>を帯<sup>おび</sup>  
 させてい<sup>る</sup>。山<sup>やま</sup>の頂<sup>たか</sup>の夕<sup>ゆう</sup>焼<sup>や</sup>は最<sup>さい</sup>後<sup>ご</sup>の光<sup>ひかり</sup>を見<sup>み</sup>せてい<sup>る</sup>。あ<sup>の</sup>広<sup>ひろ</sup>野<sup>の</sup>を女<sup>めが</sup>神<sup>かみ</sup>達<sup>たち</sup>が歩<sup>あ</sup>い<sup>て</sup>い<sup>て</sup>、

手足の疲れる代りには、尊い草を摘み取つて来るのだが、それが何だか我身に近付いて来るように思われる。あの女神達は素足で野の花の香を踏んで行く朝風に目を覚し、野の蜜蜂と明るい熱い空気とに身の周囲を取り巻かれてゐるのだ。自然はあれに使われて、あれが望からまた自然が湧く。疲れてもまた元に返る力の消長の中に暖かい幸福があるのだ。あれあれ、今黄金の珠がいざつて遠い海の緑の波の中に沈んで行く。名残の光は遠方の樹々の上に瞬々している。今赤い靄が立ち昇る。あの靄の輪廓に取り巻かれてゐる辺には、大船に乗つて風波を破つて行く大胆な海国の民の住んでゐる町々があるのだ。その船人はまだ船の櫓の掻き分けた事のない、沈黙の潮の上を船で渡るのだ。荒海の怒に逢うては、世の常の迷も苦も無くなつてしまふであらう。己はいつもこんな風に見て感じてゐるが、一転して近い処を見ると、まあ、何たる殺風景な事だらう。何だかこの往来、この建物の周囲には、この世に生れてから味わずにしまつた愉快や、泣かずに済んだ涙や、意味のないあこがれや、当の知れぬ恋などが、靄のようになつて立ち籠めてゐるようだ。(窓に立ち寄る。)何処の家でも今燈火を点けている。そうすると狭い壁と壁との間に迷や涙で包まれた陰気な世界が出来て、人の心はこの中に擽にせられてしまふのだ。あるいは幾人か集つて遠い処に行つてゐる一

人を思ったり、あるいは誰か一人に憂き事があるという、皆が寄って慰めるのだ。しかし己は慰めという事を、ついで経験した事がない。ほんに世の中の人々は、一寸した一言をいうては泣き合ったり、笑い合ったりするもので、己のように手の指から血を出して七重に釘付にせられた門の扉を叩くのではない。一体己は人生というものについて何を知っているのだろうか。なるほどどうやら己も一生というものの中に立つていたらしゅうは思われる。しかし己は高が身の周囲の物事を傍観して理解したというに過ぎぬ。己と身の周囲の物とが一しよに織り交ぜられた事は無い。周囲の物に心を委ねて我を忘れた事は無い。果ては人と人とが物を受け取ったり、物を遣ったりしているのに、己はそれを余所に見て、唾や糞のような心でいたのだ。己はついで可哀らしい唇から誠の生命の酒を吞ませて貰った事はない。ついで誠の嘆にこの体を揺られた事は無い。ついで一人で噎泣をしながら寂しい道を歩いた事はない。どうかした拍子でふいと自然の好い賜に触れる事があつてもはつきり覚めている己の目はその臆気な幸を明るみへ引出して、余りはつきりした名を付けてしまったのだ。そして種々な余所の物事とそれを比べて見る。そうすると信用というものもなくなり、幸福の影が消えてしまう。たまたま苦勞らしい嘆らしい事があつても、己はそれを考の力で分析してしまつて、色

の褪めた気の抜けた物にしてしまったのだ。ほんに思えばあの嬉しさをこの胸にぴったり抱き寄せるべきであつたらうに。あの苦勞の影を熟く味つたら、その中からどれ程嬉しさが沸いたやら知れなんだ物を。ああ、悲の翼は己の体に触れたのに、己の本性なために悲の代に詰まらぬ不愉快が出来たのだ。(物に驚きたるように。)もう暗くなつた。己はまた詰まらなくよくよと物案じをし出したな。ほんにほんに人の世には種々な物事が出来て来て、譬えば變つた子供が生れるような物であるのに、己はただ徒に疲れてしまつて、このまま寝てしまわねばならぬのか。(家来ランプを点して持ち来り、置いて帰り行く。)ええ、またこの燈火が照すと、己の部屋のがらくた道具が見える。これが己の求める物に達する真直な道を見る事の出来ない時、厭な間道を探し損なつた記念品だ。(十字架の前に立ち留まる。)この十字架に掛けられていなさる耶蘇殿は定めて身に覚えがあるう。その疵のある象牙の足の下に身を倒して甘い焔を胸の中に受けようと思ひながら、その胸は煖まる代に冷え切つて、悔や悶や恥のために、身も世もあられぬ思をしたものが幾人あつた事やら。(一面の古画の前に立ち留まる。)

○ お前はジョコンダだな。その秘密らしい背景の上に照り輝いて現われている美しい手足や、その謎めいた、甘いような苦いような口元や、その夢の重みを持つてゐる瞼の

飾かざりやが、己に人生というものをどれだけ教えてくれたか。己の方からその中へ入れた程しきや出して見せてはくれなかつたでは無いか。(身を返して櫃の前に立ち留まる。)

この盃さかずきの冷たい縁ふちには幾度いくたびか快樂の唇が夢現ゆめうつの境さかいに触れた事であろう。この古い琴ねいろの音色には幾度いくたびか人の胸むそに密ひそやかな漣さざなみが起つた事であろう。この道具のどれかが己をそういう目に遇あわせてくれたなら、どんなにか有難く思つたらうに。この木彫きぼりや金かね彫りの様々な図ずは、瓶かめもあれば天使もある。羊の足の神、羽根のある獣けもの、不思議な鳥、または黄金こがねいろ色の堆うずたか高い果物。この種いろいろ々な物を彫刻家が刻んだ時は、この種いろいろ々な物が作者の生いきいき々した心こころもち持もちの中から生れて来て、譬あがえば海から上つた魚うおが網うおに包まれるように、芸術の形式に包まれた物であろう。己はお前達の美に縛せられて、お前達もてあそを弄かんだお蔭かげで、お前達の魂たましいを仮面かめんを隔へてて感じるように思つた代かわりには、本当の人生の世界が己には霧の中に隠れてしまった。お前達が自分で真まことの泉いづみの辺ほとりの真まことの花を摘とんでいながら、己の体を取り巻いて、己の血を吸つたに違ちがひない。己は人工を弄いんだために太陽をも死んだ目から見、物音をも死んだ耳から聴くようになったのだ。己は何日いっもはつきり意識してもいず、また丸で無意識でもいず、浅たのしみい楽なげき小さい嘆なげきに日を送つて、己の生涯は丁度半分はまだ分らず、半分はもう分らなくなつて、その奥の方にぼんやり人生が

見えている書物のようなものになつてしまった。己の喜だの悲だのというものは、本当の喜や悲でなくつて、謂わば未来の人生の影を取り越して写したもののか、さもなければ本当に味のある万有のうつろな図のようなものであつて、己はつまり影と相撲を取つていたので、己の慾という慾は何の味も知らずに夢の中に草臥れてしまつたのだ。振返つて己の生涯を見れば、走つて道が抄らず、勇を振つて戦いに勝たれず、不幸があつても悲しくないし、幸福があつても嬉しくないし、意味の無い問には意味の無い答が出て来る。暗の闇から朧気な夢が浮んで、幸福は風のように捕え難い。そこで草臥た高慢の中にある騙された耳目は得べき物を得る時無く、己はこの部屋にこの町に辛抱して引き籠つているのだ。世間の者は己を省みないのが癖になつて、己を平凡な奴だと思つてい  
るのだ。(家来来て 桜 実 一皿を机の上に置き、バルコンの戸を鎖さんとす。) 戸は  
まあ開けて置け。(問。) 何をそんなに吃驚するのだ。

家来。申上げても嘘だといつておしまいなさいませう。(半ば 独 言のように、心配  
らしく。) ははあ、あの離座敷に隠れておつたわい。

主人。誰が。

家来。何だかわたくしも存じませぬ。厭らしい奴が大勢でございます。



主人。乞食こじきかい。

家来。如何いかがでしようか。

主人。そんなら庭から往来へ出る処の戸を閉めてしまつて、お前はもう寝るが好いい。己おれには構かまわなくても好いいから。

家来。いえ、そのお庭の戸は疾とつくに閉めてあるのでございませから、気味が悪うございませ。何しろ。

主人。どうしたと。

家来。ははあ、また出て来て、庭で方々へ坐すわりました。あのアポルロの石像のある処の腰掛に腰を掛ける奴もあり、井戸の脇わきの小蔭こかげに蹲しゃがむ奴もあり、一人はあのスフィンクスの像に腰を掛けました。丁度タクスの樹の蔭になつて好よくは見えません。

主人。皆みんなな男おとこかい。

家来。いえ、男もいますし女もいます。乞食らしい穢きたない扮装みなりではございません。銅版画どうばんえなんぞで見るような古風な着物を着ているのでございませ。そしてそのじつと坐つてゐる様子の気味の悪い事ことたらございません。死人しにんのような目で空を睨にらむように人の顔を見ています。おお、気味が悪い。あれは人間ではございませんぜ。旦那様だんなさま、お怒おこりな

すつてはいけません。わたくしは何と仰おつしやつても彼奴あいつのいる傍そばへ出て行く事は出来ませ  
ん。もしか明日あしたの朝起きて見まして彼奴あいつが消えて無くなつていれば天たすけの助たすけというもので  
ございます。わたくしは御免ごうむを蒙こうむりまして、お家の戸とじまり閉とじまりだけいたしまして、錠前ていぜんの処  
へはお寺から頂いて来たお水でも振り掛けて置きましょう。何にいたせわたくしはつい  
ぞあんな人間を見た事もございませぬし、また人間があんな目付めつきをいたしているはずが  
ございませぬ。

主人。どうともお前の勝手にするが好い。もう用事はないから下さがつて寝てくれい。(暫しばらく  
物を案ずる様子にてあちこち歩く。舞台の奥にてヴァイオリンの音ね聞ゆ。物懐しげに人  
の心を動かす響なり。初めは遠く、次第に近く、終ついにはその音おと暖ぬるかに充みち渡りて、壁かべ  
隣なりの部屋より聞ゆる如ごとし。)音楽おとだな。何だか不思議に心に沁しみみ入るような調ていべだ。  
あの男が下らぬ事を饒舌しゃべつたので、己まで気が狂つたのであるまい。人の手で弾ひくヴ  
ァイオリンからこんな音ねの出るのを聞いたことはこれまでに無いようだ。(右の方に向  
き、耳みみ聳そばだてて聞く様子にて立ちおる。)何だか年とし頃ころ聞きたく思つても聞かれなかつ  
た調しらべでもあるように、身に沁しみみて聞える。限かぎりなき悔くいのようにもあり、限かぎりなき希望きぼうのよ  
うにもある。この古家ふるいえの静しずかな壁かべの中うちから、己おれ自身の生涯せいぎが浄じやうめられて流れ出るよ

うな心持がする。譬えば母とか恋人とかいうようななくなつてから年を経たものがまた歸つて来たように、己の心の中に暖うちあたたかいような敬けいけん虔けんなような考かんがえが浮んで、己を少年の海に投げ入れる。子供の時、春の日ひより和よりに立つていて体が浮いて空中を飛ぶようで、際限はてしも無いあくがれが胸に充ちた事がある。また旅をするようになってから、ある時は全世界が輝き渡つて薔薇ばらの花が咲き、鐘の音が聞えて余所の光明に照されながら酔えいご心地ちになつていた事がある。そういう時はあらゆる物事が身に近く手に取るように思われて己も生きた世界の中の生きた一人と感じたものだ。そういう時はあらゆる人の胸を流れる愛なぐれの流ながれが、己の胸にも流れて来て、胸が広うなつたような心持がしたものだ。今はそんな心持は夢にもせぬ。この音楽がもう少しこのまま聞えていて、己の心を感動させてくれれば好い。これを聞いている間あいだは、何だか己の性命が暖かく面白く昔に帰るような。そして今まで燃えた事のある甘い焰ことごとが悉く再生して凝り固かたまつた上皮を解かしてしまつて燃え立つようだ。この良心の基礎から響くような子供らしく意味深げな調を聞けば、今まで己の項うなじを押おしかが屈かめていた古臭い錯雑した智識ちしきの重荷が卸されてしまうような。そして遠い遠い所にまだ夢にも知らぬ不思議の生活があつて、限無き意味を持つている形式に現われているのが、鐘の音ねで知らされているような。(ほとんど突然と音楽の声止やむ

。や、音楽が止んだ。己の心を深く動かした音楽が、神と人との間の不思議を聞させるような音楽が止んだ。大方己のために不思議の世界を現じた楽人は、詰らぬ乞食か何かで、門に立つて楽器を鳴らしていたのが、今は曲を終ったので帽子でも脱いで、その中へ銅貨を入れて貰おうとしているのだろう。（右手の窓の処に立ち寄る。）この窓の下の処には立つていない。どうも不思議だ。何処にいるのか知らん。あつちの方の窓から覗いて見よう。（右手扉の方へ行かんとする時、死あらわれ、徐に垂布を後にはねて戸口に立ちおる。ヴァイオリンは腰に下げ、弓を手に持ちいる。驚きてたじたじと下る主人を、死は徐に見やりいる。）まあ、何という気味の悪い事だろう。お前の絃の音はあれほど優しゆう聞えたのに、お前の姿を見ると、体が縮み上るような心持がするのはどうしたものだ。それに何だか咽が締るようで、髪の毛が一本一本上に向いて立つような心持がする。どうぞ帰ってくれい。お前は死だな。ここに何の用がある。ええ気味の悪い。どうぞ帰ってくれい。ええ、声を立てようにも声も立てられぬわい。（へたへたと尻餅を突く。）命の空気が脱け出てしまうような。どうぞ帰ってくれい。誰がお前を呼んだのか。帰れ帰れ。誰がお前をこの内に入れたのか。死。立て。その親譲りの恐怖心を棄ててしまえ。わしは何もそう気味の悪い者ではない。

わしは骸骨では無い。男神ジオニソスや女神ウエヌスの仲間で、靈魂の大御神がわしじや。わしの戦ぎは総て世の中の熟したものの周囲に夢のように動いておるのじや。其方もある夏の夕まぐれ、黄金色に輝く空気の中に、木の葉の一片が閃き落ちるのを見た時に、わしの戦ぎを感じた事があるであろう。凡そ感情の暖かい潮流が其方の心に漲つて、其方が大世界の不思議をふと我物と悟つた時、其方の土塊から出来ている体が顫えた時には、わしの秘密の威力が其方の心の底に触れたのじや。

主人。もう好い好い。解つた。まだ胸は支えているが、兎に角お前を歓迎する。(間。)  
しかし何の用があつて此処へ来たのだ。

死。ふむ。わしの来るのには何日でも一つしか用事はないわ。

主人。まだそれまでには間があるはずだ。一枚の木の葉でも、枝を離れて落ちるまでには、たつぷり木の汁を吸っている。己はそこまになつてはいぬ。己はまだ生きるといふように生きて見た事がないのだ。

死。兎に角、誰も歩く命の駅路を其方も歩いて来たのじや。

主人。己も若い時はあつたに違いないが、その時は譬えば子供のむしつた野の花が濁つた流ながれの上に落ちて、我知らず流れるように、若い間の月日は過ぎ去つて、己はついぞそれ

を生活だと思つた事は無い。それから己は生活の格子戸の前に永らく立つていたものだ。そして何日かは雷のような音がして、その格子戸が開くだろうと、甘いあくがれを胸に持つて待つていて見たけれど、とうとう格子戸は開かずじまつた。そうかと思えばあの時己はどうしてはいつたともなく、その戸の中にはいつていた事もある。しかしその時は己の心が何物かに縛られていて、深い感じは起さずじまつた。そういう時は見ても見えず、聞いても聞えず、心は何処か余所になつてしまつていて、貴い熱も身を温めず、貴い波も身を漂わさず、他の人が何日か出會つて、一度は争つて、終には恵みを受ける習の神には己は逢わずじまつた。

死。いや。この世の生活をこの世らしゆう生きて通る事だけは、誰にも授けられているように、其方にも確に授けてあつた。其方の心の奥にも、このあらゆる無意味な物事の混沌たる中へ関係の息を吹込む靈魂は据えてあつた。この靈魂を寝かして置いて混沌たる物事を、生きた事業や喜怒哀樂の花園に作り上げずにいて、それを今わしが口から聞くというのは、其方の罪じや。人というものは縛せられてもおり、またある機会にはその縛を解かれもするものじや。夢の中に泣いて苦勞に疲れて胸にはあくがれの重荷を負うて暖かい欲望を抑えながらも、熟すればわしの手に落ちるのが人生じや。

主人。その熟している己ではないから、どうぞ許して貰いたい。己はまだこの世の土に嘯り付いていたいのだ。お前に逢うての怖しさに、己の縛が解けてしまった。どうやらこれからは本当に生きて見られそう。今のように強い欲望があるからは、この世の物事に魂を打入れて見る事も出来よう。これからさき生かして置いてくれるなら、己は決して他の人間を物の言えぬ着物のように、または土偶か何かのように扱いはせぬ。どんな詰まらぬ喜でも、どんな詰らぬ歎でも、己は真から喜んで真から歎いて見る積りだ。人生の柱になつてゐる誠というものもこれからは覚えて見たい。これからは善と悪とが己を自由に動かして、己を喜ばせたり怒らせたりするようにしようと思う。そうしたならば今まで影のように思つていた世の中の物事が生きて働くようになる。そうしたら受ける身も授ける身も今までのように冷かになつていないで、到る処生きた人間に逢われよう。（死は冷然として取り合はぬ様子ゆえ、主人は次第に恐を抱く。）どうぞどうぞ思い返して見てくれい。お前は己が愛をも憎をも閲して来たように思うであらうが、己はただの一度もその味を真から嘗めた事がない。つい表面の見えや様子や、空々しい詞を交して来たばかりだ。その証拠にお前に見せる物がある。この手紙の一束を見てくれい。（忙がしげに抽斗を開け、一束の手紙を取り出す。）恋の誓言、恋の悲歎、何

もかもこの中に書いてはある。己が少しでもそれを心に感じたのだと思つて貰うと大違  
いだ。(主人は手紙の束を死の足許あしもとに投げ付く。手紙床の上に飛び散る。)これが己  
の恋の生涯だ。誠という物を嘲笑あざわみ笑つて、己はただ狂言をして見せたのだ。恋ばかりで  
はない。何もかもこの通りだ。意義もない、幸福もない、苦痛もない、慈愛もない、憎  
悪もない。

死。阿房たわけものめが。好よいわ。今この世の暇いとまを取らせる事じゃから、たった一度本ど当の生活  
というものを貴とうとばねばならぬ事を、其方そちに教えて遣わそう。あつちに行つて黙つて立つ  
ていてここの処を好く見て、凡そこの世に生きとし生けるものは、皆みんなな慈愛を持つてい  
るのに、其方そち一人がうつろな心で戯たわげながらに世を渡つたのじゃという事をしかと胸に  
覚えるが好よい。

(死は物呼び寄するが如き音をヴァイオリンにて弾たんじ出いだす。この時死は寢室の  
扉かたわらの傍、舞台の前の方かた、右手に立ちおり、主人は左手壁の方かた、薄暗き処に立ちお  
る。右手の扉を開きて主人の母出いで来きた。更けたりという程にはあらず。長き黒  
き天鷲絨の上着を着し、顔の周囲まわりに白きレースを付けたる黒き天鷲絨の帽子を冠かむ  
りおる。白き細き指にレースの付きたる白き絹ハンカチーフの紛ハ※を持ちおる。母は静しずかに扉を



開ひらいて出でで、静しずかに一ま間まの中うちをあちこち歩あむ。)

母。この部屋の空気を呼吸すれば、まあ、どれだけの甘い苦痛を覚える事やら。わたしがこの世に生きていた間あいだの生活の半分はラヴェンデルの草の優しい匂においのように、この部屋の空気に籠かこっている。人の母の生涯というものは、悲かなが三分一ぶで、後あとの二分は心配と責せ苦めとであろう。男というものにはそれがちつとも分らぬわいの。(櫃この傍そばにて。)この櫃この隅はまだ尖とっているやら。日いつ外ぞや、あの子がここで頭を打うって血を出でした事がある。まだ小さいのに気が荒あかつたゆえ、走まり廻まつてばかりいて、あれ危あないと思おもつても止とめる事が出来いなんだ。ああ、この窓まじや。あの子が夜遊あそびに出いて帰からぬ時は、わたしは何い時つもここに立たつて真黒まっくろな外を眺のめて、もうあの子の足音あしながしそうなものじやと耳みみを澄すまして聞いていて、二時ふた時じが打うち三時さん時じが打うち、とうとう夜よの明あけた事も度々ある。それをあの子は知らなんだ。昼間も大抵一人ひとりでいた。盆栽の花に水を遣たつたり、布団ふとんの塵ほこりり、扉つの撮まみりの真ま鍬くわを磨こいたりする内に、つい日は経たつてしもうた。その間あいだ、頭あたまの中うちには、まあ、どんな物があつたろう。夢のような何とも知れぬ苦痛の感じが、車の輪りんの廻まるように、頭あたまの中うちに動ういていた。あの何とも言えぬ心持は、この世界の深い深い秘密ひみつと関係かんけいしている人の母の心であろう。しかしもうわたしにはあの甘い苦くるみしみを持つもつている、

ここの空気を吸う事は出来ぬ。わたしはもう行かねばならぬ。(真中の戸口より出で

去る。)

主人。お母様。かあさま

死。黙れ。其方が母はもう帰らぬわ。そち

主人。お母様。お母様。どうぞ今一度此処へ戻つて来て下さりませ。このわたしの唇は何日も確り結んでいて高慢らしく黙っていたのだが、今こそは貴女の前に膝を突いて、この顫う唇を開けてわたくしの真心が言つて見たい。ああ、何卒母上を呼んでください。引き留めてください。何故お前は母上の歸つて行くのを見ていながら引留めてはくれなんだか。

死。わしの知つた事では無い。母に対してどうするのも、皆其方の思うままであつたのじや。

主人。ええ、この胸に何の感じもなかつたか。この身の根差はあのお母様であるのを、あのお母様のお側にいるのは、神の傍にかたわらいるのと同じわけであるのを、己は一度も知らなんだ。もうこうなつては取返しがつかぬわい。

(死は主人の煩悶を省みず、古民謡の旋律を弾き出す。娘一人、徐に歩み入る、

派手なる模様あるあつさりとしたる上着を着、紐を十字に結びたる靴を穿き、帽子を着ず、頸の周囲にヴェエルを纏えり。

娘。あの時の事を思えば、まあ、どんなに嬉しかったろう。貴方はもう忘れておしまいなされたか。貴方はわたしを非道い目にお逢せなさいました。ほんにほんに非道いめに。だが、世の中の事は何でも苦痛に終らぬ事は無い。ほんにわたしの嬉しいと思つたその数は、指を折つて数えるほどであるけれど、その日の嬉しかった事は夢のようでございました。この窓の前の盆栽の花は、今もやはり咲いている。ここにはまたその頃のがたがたするような小さいスピネット（楽器）もある。この筆筒はわたしが貴方に頂いた御文を貴方の下すつた品物と一しよに入れて置いた処でございます。わたしのためには御文も品物も優しい唇で物をいってくれました。何日やら蒸暑い日の夕方に、雨が降つて来た時に貴方と二人でこの窓の処に立つて濡れた樹々の梢から来る薫を聞いた事があります。ああ、何もかも皆な過ぎ去つてしまいました。そして皆な儂い恋の小さい奥城の中に埋まつてしまいました。しかしその埋まつたものは何もかも口でいわれぬ程美しいうごぎいました。それは貴方のせいで美しかったのでございます。それなのに貴方はとうとうわたくしを無慙にも棄てておしまいなさいました。丁度花を持って遊ぶ子が、

遊び倦あきてその花を打捨うちちやつてしまふように、貴方はわたしを捨てておしまいなさいました。悲しい事にはわたくしは、その時になつて貴方の心を繋つなぐようなものを持つていませんでした。(間。) 貴方の一番終しまいに下すつたあの恐ろしいお手紙が届いた時は、わたしは死のうと思ひました。それを今打明けて申すのは、貴方に苦しい思ひをさせようと思つて申すのではございません。それからわたしは貴方に最後の御返事ごへんじを致そうかと存じました。その手紙には非道く悲しい事も書かず、恨うらみがましい事も書かず、つい貴方のお心にわたしの心がよう分つて、貴方が今一度どわたしを可哀く思つて少しばかり泣いて下さるよう書きたいと存じました。しかしわたしはどうとうその手紙を書かずにしまひました。そんな手紙が何になりましたようぞ。何故なぜと申しますものに、貴方の下すつたお手紙はわたしの心の中うちを光明と熱とで満したようぞ、わたしはあれを頂く頃は昼ひる中かも夢を見ているように、うろろうしておりましたが、あれがどれだけの事であつたやら、後で思えばわたくしには分りません。仮令たとひお手紙を上げたとして、虚うそが信まことになりもせず、涙をどれ程注そそいでも死んだものが生き戻りはいたしません。世の中は不思議なもので、わたしもそのまま死にもせず、あれから幾十いくその寂さびしき厭つら苦くさを聞けいた上でわたしは漸ようよう々死にました。そしてその時わたしは何卒どうぞ貴方のお死しなざる時、今一度どお側へ

来たいと心に祈つて死にました。それは貴方に怖い思をさせたり、貴方を窘めたりしようというのではございませぬ。譬えて申せば貴方が一杯の酒を呑乾しておしまいなされる時、その酒の香がいつか何処かであった嬉しさの香に似ていると思召すように、貴方が末期にわたくしの事を思い出して下されば好いと思つたばかりでございます。(娘去る。主人は両手にて顔を覆いいる。娘の去るや否や、一人の男直に代りて入来る。年齢はおよそ主人と同じ位なり。旅路にて汚れたりと覚しき衣服を纏いいる。左の胸に突込んだるナイフの木の柄現われおる。この男舞台の真中に立ち留まり主人に向いて語る。)

男。はあ。君はまだこの世に生きているな。永遠の洒落者め。君はまだホラチウスの書などを読んで世を嘲っているのかい。僕が物に感じるのを見て、君は同じように感じると見せて好くも僕を欺したな。君はあの時何といった。実にこの胸に眠っているものを、夜吹く風が遠い便を持って来るようにお蔭で感じるといったのう。実に君は風の伝える優しい糸の音だったよ。ただその風というものが実は誰かの昔吐いた息であったのだ。僕の息でなければ外の人の息であったのだ。ほんに君と僕とは大分長い間友人と呼び合つたのだ。ははあ、何が友人だ。君が僕と共にしたのは、夜昼とない無意味の対話、同

じ人との交際つきあい、一人の女を相手にしての偽りの恋に過ぎぬ。共にしたとはいうけれど、譬たとへえば一家の主しゆうぼく僕ぼくがその家を、輿こしを、犬を、三度の食事しょくを、鞭むちを共にしていると變かへつた事はない。一人のためにはその家は喜見城きけんじょうで、一人のためには牢獄ろうごくだ。一人のためには輿こしは乗るもので、一人のためには輿こしは肩から血を出すものだ。一人のためには犬は庭へ出て輪くるまを潜くぐつて飛ばせて見て楽しむもので、一人のためには食しょく物ぶつをやつて介抱かいぼうをするものだ。僕の魂たましいの生み出した真珠まじゆのような未成品の感情を君は取とつて手遊おもちゃにして空中なげうに擲なげうつたのだ。忽たちち親ましみ、忽うとんち疎とんずるのが君の習ならいで、咬かみ合せた齒はをめつたに開かず、真心を人の腹中に置くのが僕の性分であつた。不遠慮ふえんりよがちに何にでも手を触れるのが君の流儀りうぎで、口から出かかつた詞ことばをも遠慮えんりよがち勝はんとに半途はんとで止やめるのが僕の生うまれつき付つきであつた。この二人の目の前まへにある時一人の女子おなごが現れた。僕の五官ごがんは疫病えいびんにでも取付とりつかれたように、あの女子おなごのために蹣跚よろめいてただ一つの的ねらを狙ねらつていた。この的ねらこの成就じゆうじゆは暗やみの中に電光いなげずまの閃ひらくような光と薰かほとを持つているように、僕には思われたのだ。君はそれを傍はたから見て後で僕に打明うちあけてこう云いつた。あいつの疲れたような洩しいような威嚴いげんが気に入つた。あの若さで世の偽いつわりに欺うたがかれたのを悔くいたような処ところのあるのを面白く感じたと言いつた。そこで欺だまして己うぬが手に入れて散々さんざん弄あそんだ揚句やうこに糟かすを僕に投なげてくれた。姿も心

も変り果てて、渦巻いていた美しい髪の毛が死んだもののように垂れている化物にして、それを僕に授けたのだ。それまでは、何処やら君の虚偽を感じてはいてもはつきり君を憎むという心もなかつたが、その時から僕は君を憎み始めて、君から遠ざかるようにした。その後僕は君と交つている間、君の毒氣に中てられて死んでいた心を振り起して高い望を抱いたのだが、そのお蔭で無慙な刺客の手にかかつて、この刃を胸に受けて溝壑に捨てられて腐ってしまったのだ。しかし君のように誰のためにするでもなく、誰の恩を受けるでもなく、空しく生きて空しく死ぬるのに比べて見れば、僕は死んでも死にが甲斐があるのだ。(男去る。)

主人。誰のためにするでもなく、誰の恩を受けるでもない。(徐に身を起す。) 譬えば下手な俳優があるきつかけで舞台に出て受持だけの白を饒舌り、周匝の役者に構わずに己が声を己が聞いて何にも胸に感ぜずに楽屋に帰ってしまうように、己はこの世に生れて来て何の力もなく、何の価値もなく、このままこの世を去らねばならぬか。何でこれ程の思を己はせねばならぬのか。何で死が現われて来て、こうまざまざと世の様を見せしてくれねばならぬのか。實在のものが儂い思出の影のように見えるまで、眞の生活の物事にこの心を動かさねばならぬのか。何故お前の弾いた糸の音が丁度石瓦の中に

埋められていた花のように、意識の底に隠れている心の世界を掻き乱してくれたのか。ええ、こうなる上は区々たる浮世の事に乱されずに、何日もお前の糸の音を聞いてお前の側にいるも好かろう。己を死に導いてくれるなら己は甘んじて跟いて行こう。今までの己は生とはいっても真の生ではなかったから、己は今から己の死を己の生にして見よう。死も生も認めぬ己が強いて今までを生といって、お前を死と呼ばねばならぬはずがない。お前は僅か一秒の中に生涯を籠めて見せてくれた。そのお前の不思議な威力に己の身を任せてしまつて、今までの影のような生涯を忘れてしまおう。（暫く物を案ずる様子。）思えばこう感じるのも死にかかつての一時の事かも知れぬが、兎に角今までにこれ程感じた事はないから、己のためには幸福だ。このまま死んでもうても、今我胸に充ちたものは、今までの色も香もない生活には遥に優っているに違いない。己は己の存在を死んで初めて知るのであろう。譬えば夢を見る人が、夢の感じの溢れたために、眼の覚めるのと同じように、この生活の夢の感じの力で、己は死に目覚めるのか。（息絶えて死の足許に伏す。）

死。（首を振りつつ徐に去る。）思えば人というものは、不思議なものじゃ。解すべからざるものをも解し、文に書かれぬものをも読み、乱れて収められぬものをも収めて、終



には永遠の闇うちの中に路を尋ねて行くと見える。(中央の戸より出で去り、詞の末のみ跡に残る。室内寂せきとして声無し。窓の外に死のヴァイオリンを弾たんじつつ過ぎ行くを見る。その跡に跟つきて主人の母行き、娘行き、それに引添しゅじんいて主人に似たる影行く。

○幕

(明治四十一年十二月)



# 青空文庫情報

底本：「於母影 冬の王 森鷗外全集」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年3月21日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：米田

2010年8月5日作成

2011年4月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 痴人と死と

ホフマンスタアル Hugo von Hofmannsthal

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 森鷗外訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>